News Release

【発信】国立大学法人
富山大学総務部総務課
広報・基金室
(TEL) 076-445-6028
(FAX) 076-445-6063

令和 3 年 6 月 9 日

報道機関各位

高齢者の認知症

配偶者と一緒にいないのは認知症のリスク

富山県認知症高齢者実態調査の結果より

富山大学地域連携推進機構地域医療保健支援部門は、 平成 26 年に富山県が実施した富山県認知症高齢者実態調査の追加分析を行い、高齢者の婚姻状況と認知症に関する新たな知見を得ましたので公表します。

富山県認知症高齢者実態調査の対象者は、県内の 65 歳以上の高齢者から 0.5%無作為抽出された 1537 人のうち、同意の得られた 1303 人（同意率 84.8%）です。糖尿病などの生活習慣病は、認知症のリスクと言われています。今回の分析では、認知症の方 137 名と認知症でない方 1034 名を対象に、生活習慣病に婚姻状況を加えて認知症との関連性を評価しました。敦賀市立看護大学の中堀伸枝講師（富山大学大学院卒）、富山大学の山田正明助教、関根道和教授らが分析しました。

年齢が高いほど認知症に対するオッズ比（リスク指標）が非常に高くなりますが、配偶者と一緒にいない状況（死別が 88%、他に離婚、未婚）も認知症と関連することが分かりました。配偶者と一緒にいない人の認知症に対するオッズ比は配偶者といる人（同居と施設入所を含む）に比べ 1.71 倍でした。また、生活習慣病との関連では、配偶者といる人と比較して、配偶者と一緒にいない人の脳卒中に対するオッズ比は 1.81 倍でした。その他の生活習慣病との関連はみられませんでした。

配偶者と死別すると生活習慣が悪くなることが報告されています。さらに、死別は人生における最大のストレスとされ、精神状態が悪化しやすくなると言われています。死別者は、脳卒中などの生活習慣病になることや精神状態の悪化から、認知症になりやすくなることが考えられました。今回の研究結果から、高齢期の認知症への対策として、死別などの婚姻状況の変化にも注意をむけていくことが重要であることが分かりました。

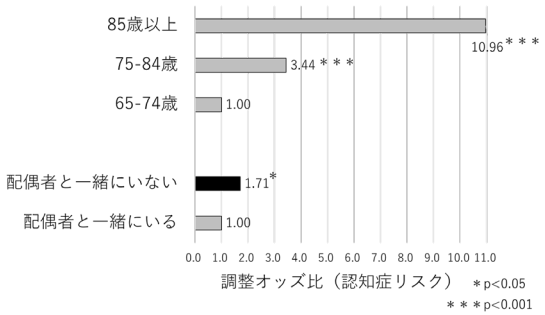
調査結果の詳細は、5 月 25 日に日本老年精神医学会の機関誌 Psychogeriatrics に掲載されました。高齢者の認知症に対する婚姻状況のリスクを包括的に評価した貴重な研究と考えています。

【本研究に関する問い合わせ先】
敦賀市立看護大学　中堀伸枝
TEL: 0770-20-5520　FAX: 0770-20-5540　E-mail: n-nakahori@tsuruga-nu.ac.jp
富山大学地域連携推進機構　地域医療保健支援　副部門長　山田正明
930-0194 富山市杉谷 2630　TEL 076-434-7270 FAX 076-434-5022
E-mail: masaakit@med.u-toyama.ac.jp

（図1） 配偶者と一緒にいない状況は認知症のリスク

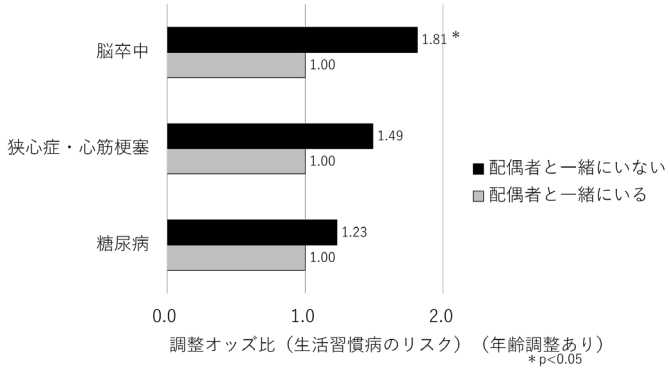
- 婚姻状況と認知症との関係では、配偶者と一緒にいない状況（死別、離婚、未婚）の認知症に対する調整オッズ比（リスク指標）は 1.71 と統計学的に有意に上昇していました。
- 配偶者と一緒にいない状況の 88%を占めた死別は、人生における最大のストレスとされ、精神状態が悪化しやすくなると言われています。婚姻状況の変化から精神状態が悪化し、うつ病や認知症になることが推察されます。

婚姻状況と認知症の関係



（図 2） 配偶者と一緒にいない状況は脳卒中のリスク

婚姻状況と生活習慣病の関係



- 生活習慣病との関連では、配偶者といる人と比較して、配偶者と一緒にいない人の脳卒中に対するリスクは 1.81 倍でした。
- 配偶者と一緒にいるか否かによって、糖尿病や心臓疾患などの生活習慣病に統計的に有意な差はありませんでした。
- 配偶者と死別すると生活習慣が悪くなることが報告されています。死別者は、脳卒中などの生活習慣病への罹患から、認知症になりやすくなることが考えられます。

今回の研究結果から、高齢期の認知症への対策として、死別などの婚姻状況の変化に注意をむけていくことが重要であることが分かりました。

出典： Nakahori N, Sekine M, Yamada M, Tatsuse T, Kido H, Suzuki M. Association between marital status and cognitive function in Japan: results from the Toyama Dementia Survey.
URL: https://doi.org/10.1111/psyg.12724